佳作

過去一番の「ありがとう」

宮城県 宮城県仙台二華中学校二年　照井 美志人

「もう大丈夫だよ。」

今思えば、この言葉に出会ったから、私は自分の心を大きく成長させることができたような気がする。

小学校高学年になった私は、いつも通り休み時間に友達と二人でサッカーの練習をしていた。その最中、友達が蹴ったボールが私の股の間を抜けて後ろに飛んで行った。私はすぐに後ろを向き、走ってボールを取りに行った。そのとき、しゃがみこんで泣いている男の子が目に入った。膝をすりむいているところから、転んだのだろうと推察できた。しかし私はどうすれば良いのか分からず、立ち尽くし戸惑っていた。すると、私の横を誰かが走りぬけた。一緒にサッカーをしていた友達だった。友達はすぐに男の子のもとへ駆け寄ってかがみ込み、一言目に、

「もう大丈夫だよ。」

と言った。私は驚いた。もちろん駆け寄ったことにもだ。しかし、それ以上に彼がその子にかけた一言目に、私は何とも言えない和やかさと情の深さを感じたからである。私はその言葉にひどく心をひかれた。普通であれば、泣いている子に声をかけるとしても、「大丈夫？」や「どうしたの？」などといったものだろうと思っていたからである。少ししてその子が落ち着いた様子になると、友達と私は一緒にその子を保健室まで連れて行った。保健室を出るとき、その子に、

「お兄ちゃんたちありがとう。」

と言われたのを覚えている。しかし、私は心のどこかに違和感があった。

その年の冬休み、私は家族とデパートにきていた。そこで一人で椅子に座って泣いている女の子を見かけた。私はそれを見て、親とはぐれてしまったのだろうかと思った。それと同時に、転んで泣いていた男の子を思い出した。その瞬間、私は勇気を出して女の子に近づき、

「もう大丈夫だよ。」

と声をかけた。そのあとの言葉を考えていなかったためか、頭が真っ白になってしまった。しかし、気付くと女の子が泣き止んでいた。私はその子の表情から、少し安心している様子を感じることができた。その後、女の子をインフォメーションに連れて行くと、その子は無事に父親と会うことができた。別れ際、女の子は私のもとへ近づいてくると、

「お兄さんありがとう。」

と言い残し、父親と一緒に歩いて行った。私は心のどこかにあったもやもやが晴れていくのを感じた。

あのとき、泣いていた女の子に勇気を出して声をかけた私は、友達のようにかっこよくはなかったかもしれない。それでも、デパートで周りの音に紛れながら、女の子が私に言い残してくれた言葉は、私の中で過去一番の「ありがとう」だった。